

学校教育目標

本城地域や家庭と連携して、「豊かな人間性とたくましい体を持ち、自ら学び自ら考え、協力してよりよい生活を創り出していく子ども」を育成する。

北九州市教育委員会(令和6年度事業)
○主体的に課題を解決する力の育成 ○小中一貫教育 ○外国語教育
○幼児教育の推進 ○授業時数の見直し ○特別支援教育 ○ICT活用
◇学校安全 ◇いじめ防止対策 ◇長欠・不登校対策 ◎人材育成

めざす学校像

「行きたい」「行かせたい」「応援したい」学校
→ 子どもと教師が、生き生きと活躍できる学校
○ 子どもが価値を感じ、学びたくなる学校
○ 子どもの安全や安心を確保できる学校
○ 思いやりと信頼で結ばれた学校
○ 教職員が助け合い、学び合う学校
○ 保護者や地域に開かれた学校

めざす子ども像

◆ 思いやりのある、心優しい子ども
・あいさつができる子ども<礼を正す>
・善悪の判断ができる子ども
・困っている人を手助けできる子ども
・自己肯定感をもてる子ども

◆ かしこい子ども(学力向上)
・授業が楽しいと感じる子ども
・自分の考えを表現できる子ども
・本に親しむ子ども

◆ 心も体も健康でたくましい子ども
・目標に向かって努力する子ども
・進んで働く子ども<場を清め>
・正しい判断ができる子ども
・「早寝・早起き」等、よい生活習慣を身に付けた子ども<時を守り>

めざす教師像

自らの資質・能力の向上と、協力・協働する教師集団
○ 日々の授業を大切にし、創意工夫する教師
○ 正しいこと、大切なことを教える教師
○ 一人一人の子どもに温かく接する教師
○ 子どものために力を合わせ、支え合う教師
○ 教育公務員としての使命感を持ち、保護者や地域との信頼関係をつくり、ともに育てようとする姿勢をもつ教師

本年度の重点

1 自己肯定感を高め、子どもの「やる気スイッチ」を入れる
『目先の学力にとらわれない』『未来を生き抜く力の種をまく』
○「友だちと関わる」「たのしい」「わかる」授業。
○ICT機器の効果的活用
○授業力向上(主題研究、若年教員研修)

2 人権教育
『自他の人権を守ろうとする意識・意欲・態度と実践力』を養う
○学校教育における教育活動の基盤であるという認識のもと、全教育課程の中で推進する。
○自他の人権を尊重し、相互のよさを認め合い、個性の伸長を図る教育を行う。
○「わかる・できる・たのしい」が実感できる授業づくりに努める。→学力・進路保障
○子どもの髪型、髪の色等、悪い行いであると決めつけない。
→多様性・個性の尊重

3 特別支援教育
○どの学級にも特別に支援を要する子どもが在籍するという意識のもと、合理的配慮に努める。
○子ども一人一人の教育的ニーズを把握し、全教職員の共通理解を深め、関係機関や家庭との連携のもと、全校体制による特別支援教育の推進に努める。

4 特色のある教育活動『SDGSの視点』
○二学期制の導入 ○ニューノーマルの学校行事の創造

5 長期欠席・不登校、生徒指導対応
○学級における子どもの居場所づくり
○心のぬくもりを感じる学級づくり
『教師の声掛けに勝る子どもの声掛け』
○子どもの心によりそった、きめ細やかな対応。
○家庭への連絡→家庭環境、保護者の情報把握及び情報共有
○関係機関との連携の前に、まず『家庭訪問』
○子どもの人権を大切にする生徒指導
『子どもの見た目、家庭環境等で判断しない。特に髪型、髪の色、服装で、子どもを否定しない。子どもとの対話、学校生活の様子、対人関係、友達との交友状況等、個々の子どもの把握に努め、カウンセリングマインドの視点を大切にする。』

6 いじめに関する対応
○いじめの早期発見に努め、職員の連携により早期解決を目指す。
○子ども一人一人の様子を把握し心身両面において、日常的にケアする。
○子どもの変化を感じたら、しっかりと寄り添い、その思いを十分に聞き取る。→共感の視点から、子どもの心にしっかりと寄り添う。
○「北九州市子どもつながりプログラム」を計画的且つ確実に実施し、いじめ問題に関する未然防止に努める。

7 学校安全、及び事故対応
○まずは、「けが・事故未然防止」常に危機意識をもって
○廊下、教室の環境整備『窓側に棚を置かない』
○廊下の歩行、教室での過ごし方について徹底指導
○首から上の怪我は、即病院。『特に頭や目の怪我は要注意』
○意識がなくなる怪我や事故は即救急車。『その場から動かない』

8 防災教育
○実践に即した訓練の実施
○災害時における、保護者との連絡体制の確認

9 人材育成
○メンターの仕組みを生かした研修の実施
○ベテラン教員による若手教員の育成→学年メンター制
○OJTにより生徒指導力向上を図る

10 業務改善
○『本城の子どもは本城の全職員で育てる』のもと、緊急時の補欠対応等については、全教職員で分担する。
○授業時数の見直し、及び業務量の平準化により、子どもと教師が向き合う時間と業務時間の確保を図る。